



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マンガ＜百合＞表象論
Author(s)	郭, 如梅
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第17040号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17040
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100093
Type	doctoral thesis
File Information	Guo_Rumei_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 郭 如 梅

主査 教 授 押 野 武 志
審査委員 副査 教 授 水 溜 真 由 美
副査 教 授 田 村 容 子

学位論文題名 マンガ〈百合〉表象論

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、女性同士の親密な関係を描いた〈百合〉マンガの特質を多様な観点から論じたものである。〈百合〉が定着したゼロ年代のマンガ作品を主要な研究対象としながら、少女小説、BL（ボーイズラブ）マンガ、少年マンガなどとの比較分析において、その表現方法の共通性と差異を明らかにした。一九七〇年代の少女マンガにおいて形成された悲劇的な姉妹関係という女性同性愛の定型や、〈男性〉／〈女性〉の性役割分担、母子関係といったパターンをどのように受け継ぎつつ差異化して、〈百合〉独自のセクシュアリティ表象を獲得したのか、その変容のプロセスを個別具体的な作品分析を通して論証した。

本論文の成果は、以下の三点にまとめることができる。

第一に、新たな研究領域の開拓が挙げられる。これまでほとんど研究対象とされなかった〈百合〉マンガに、ジェンダー研究の問題意識を照射して考察することができた。マンガのレズビアン表象については、ゼロ年代までの作品の少なさに加えて、先行研究は、一九七〇年代の少女マンガ作品と二〇一〇年代の男性向けの〈百合〉表象といった二つの時期に偏っている。本論文はその先行研究の空白を埋めるものであり、〈百合〉マンガに描かれる女性同士の親密な関係の諸相を明らかにすることができた。

第二に、日本近代文学における女性同性愛表象と関連づけ、〈百合〉表象を戦前期の少女小説・少女文化との継承性において明らかにした点である。少女小説と少女マンガ双方の流れを踏まえたアプローチにより、〈百合〉と称されるセクシュアリティ表象の特質をジャンルを横断して通史的に明らかにすることができた。

第三に、〈百合〉ポルノグラフィの考察を通じて、性規範の抑圧の輪郭をマンガ独自の表現から浮き彫りにしたことが挙げられる。一九七〇年代の少年愛ものは未成年者の性暴力被害まで描くことができたのに対して、〈百合〉表象は二〇一〇年代に入っても、一部の男性読者による「理想的な」女性像に応じなければならなかった。〈百合〉作品における性表現の困難さは、同性愛表象でも生じる男女の非対称性と併せて、女性のセクシュアリティに課されてきた性規範の抑圧にあった。そうした中で、男性作家の玄鉄絢による異性愛男性向けのポルノコンテンツ『少女セクト』、女性作家の森島明子による専門誌『コミック百合姫』レーベルの『半熟女子』、女性作家のなもりによる専門誌レーベルの男性向け作品『ゆるゆり』など、〈百合〉マンガにおける性表現の多様性とその問題点を提示することができた。

総じて、キャラクター描写、効果線、コマ割り、図像の配分、フキダシの技法など、物語内容のみならずマンガというメディア特性に着目し、キャラクターの繊細な内面やキャラクター同士の多層的な関係性を分析した優れたマンガ研究となっている。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会において、上述の研究成果に関して概ね説得的に論証されており、本論文は学術的価値があるものと判断した。

ただし、問題がないわけではない。本論文において、女性同性愛・レズビアンを含めた女性同士

の関係性をテーマとして描く、小説やマンガなどメディアを横断した多様な〈百合〉作品が分析されているために、〈百合〉の定義が拡散している。少女小説・ライトノベルのような、女学生の親密さを描きながらモノガミーの関係性に囚われず女性同性愛を周縁化する作品と女性同性愛関係を異性愛と対等で肯定的な関係性として描写する『百合姉妹』などに掲載された性描写を含むマンガ作品は、読者層の違いも含めて〈百合〉作品として同列には扱えない対立点も存在する。〈百合〉作品内における差異よりも、BL マンガなどの他のジャンルの定型との差異を強調するきらいがある。それに関連して、本論文で明らかにした〈百合〉のセクシュアリティ表象の特質だけではなく、〈百合〉作品を享受する読者の側のセクシュアリティも同じく問われなければならないだろう。本論文においては、マンガ掲載媒体が想定する読者層には配慮を示しつつも、〈百合〉を享受する多様なセクシュアリティの読者層における受容の違いについての分析は手薄であった。

このような問題点は、〈百合〉作品をジャンル横断的に再検討するという、本論文の対象領域の広さと射程の長さ由来のものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。今後、本論文で触れられなかった〈百合〉作品の分析に読者論を加味して充実させれば、それらの課題は克服され、さらなる研究成果も期待される。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。